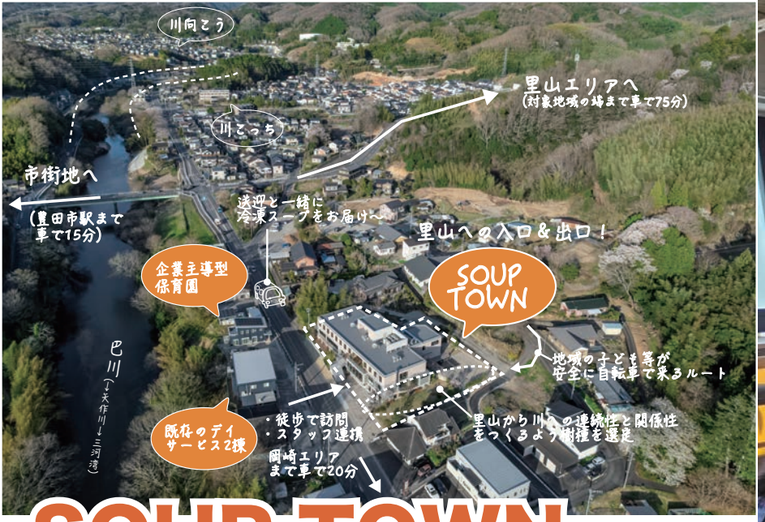


SOUP TOWN

「スープのさめない距離」で編み直す、福祉と地域のあたらしい社会圏。

- Small is beautiful, and SOUP is beautiful -











対象地域と事業者（スマイリング）の運営内容について

豊田市に合併した旧東加茂郡「松平・下山地区」で、介護福祉事業を軸に、住み慣れた地域での暮らしを支える事業を展開。



2019

リサーチ・課題検討：介護福祉施設で過ごす人の課題

1. あたりまえの暮らし、を諦めざるを得なくなる
2. 交流や選択の幅が限られ、新たな世界が広がらない
3. 関わる世代やコミュニティがより限定されてしまう

2020.4-

仮説立案：" スープのさめない距離 " で暮らそう

SOUP TOWN は、市街地エリアから里山エリアに移動する際の入口に位置する。市街地は車で 15 分の距離だが、2 本の川を挟むため心理的に遠い。里山エリアは広大（車で 75 分）だが、つながりが深く心理的に近い。この地での暮らしを支えるため、互いのことを気にかけ合う「スープのさめない距離」が不可欠であるとの仮説を立てて、プロジェクトを展開した。

2020.12-

仮説での検証①
専門職内での実験会議「SOUP」

地域での話し合いに先立ち、介護福祉の専門職限定のオンライン会議を 4 回先行実施。コンセプトの有効性を検証し、対話の手法も試した。





▲内容をまとめた冊子を作成

2021.7-

仮説での検証②
地域の未来図を対話で煮込む " スープ会議 "

支え合いのある " スープなまちづくり " に向けた地域住民との対話を開始。開所までの 4 年間で計 40 回、延べ 900 人が参加。





▲内容をスタッフがグラフィックにまとめた

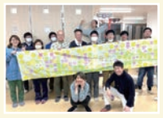
2022.3-

活動実践による検証

分科会活動を通じ、スープなまちのエッセンスを多角的に検証









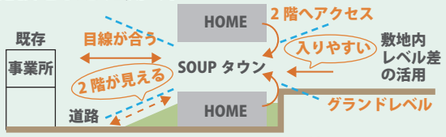
2021- 建築・各種法規制へのチャレンジ

「SOUP」な関係を編む、「まち」のような建築

助成制度の要件上、高齢者・子ども・障がい者の用途はそれぞれ区分する必要がある。この縦割りの区分は、各領域のあいだに「見えない壁」を生じさせてしまう。そこで、「まち」のように利用者が自由につながり、多様な関係性を編み出せる、SOUP タウンならではの建築としている。

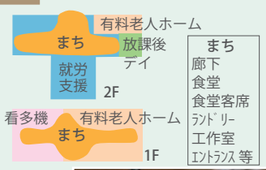
①「まち」にひらく

1・3 階に高齢者施設、2 階に子ども・就労支援施設を据え、メインフロアを 2 階にすることで、通常は内部の見えない福祉施設をまちに開く。



②「まち」でつなぐ

共用部や食堂・客席、客席、工作室など、皆で利用する場所を「まち」とし、用途や機能を横断しながら、利用者がつながる場所としている。



③「まち」をつくりこむ

用途区分の境界は全てフルオープンの建具とし、シームレスな関係とクローズな関係の両立を実現している。











得られた気づき

① QOL(Quality o of Life)+SOL(SOUP of Life)

生活の質を高めることだけでなく、つながりや新たな出会いが生まれる「人生をスープする」環境も重要。

②既存制度を地域の生業へ

障がい福祉事業のあり方を高めたレストラン運営。

③スープのさめない距離＝栄養の届く距離

孤立しがちな地域の人へ心身ともに栄養を届けるため、食のインフラの構築を目指した経済活動づくりが必要。

設計・工事期間も活動を続けることで主体性を育てる

感情とつながり、彩りと物語を編む「縁の間（えんま）」＆廊下

“私(居室)”と“公(廊下)“が滲み合う縁の間は、個の存在を自他共に再認識できる場。“私”の出し具合の調整が“公”への意識が高めてくれる。





2026.1- ご本人・ご家族へのヒアリング→縁の間づくりの協働

人生を彩る「縁の間」は、本人・家族と共創することで想いを深めていく。廊下の過ごし方も一緒に考え、生活をより豊かに。滲み出す家具や活動が、廊下を「まちの一部」に変えていく。









徐々にスタッフ中心に移行。愉しさと主体性の獲得へ。

2026.4 現在

小さくてもやさしい社会づくりは、愉しさを軸に進化し続け、今日もゆっくりと確実に回っている。

SOUP grows better every day.